

東日本大震災に関わる当協会の学術的な支援について

理事・広報副委員長
佐々木 和彦

平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による東日本大震災によって、多くの尊い人命や貴重な財産、そして膨大な社会資本を失うことになりました。同時に、主に津波によって博物館などが被災し、地質、古生物、考古、歴史、民俗学等に関わる標本や資料も少なからず失われました。これらのうち、考古、歴史、民俗学に関わる標本や資料は文化財指定や登録が行われているものが多く、行政ルートでの標本や資料の保存、修復がなされているものの、地質、古生物学に関わるものはその対象から漏れることが多いという実態でした。

当協会の会員企業は、地震発生直後から、緊急の災害調査や復旧・復興事業に関わる調査・設計業務に対応し、大いに社会貢献したことはご存じのとおりです。さらに今回、当協会の専門技術を支える重要な地質学に関わる学術貢献をすることにしたのです。すなわち、行政ルートの対象から漏れることの多い地質、古生物学に関わる標本や資料の保存事業を支援することにしたのです。

大震災によって被災した歌津魚竜館所有の貴重なウタツギョリュウなどの大型化石を、回収、保管、修復する事業を東北大学総合学術博物館の永広昌之名誉教授が中心となって実施されているという情報を得ました。また、陸前高田市立博物館では被災後、職員や他の研究機関職員、自衛隊員などにより別の場所に運び出された多くの地質標本を、洗浄、保管、修復する事業を岩手県立博物館の大石雅之首席専門学芸員を中心に実施されているお話も伺いました。

そこで、当協会より、この二つの事業を支援すべく、東北大学総合学術博物館には事業経費の支援として金10万円を寄付し、岩手県立博物館には地質標本整理用の物品を10万円分寄贈することにいた

しました。

東北大学総合学術博物館には、平成23年11月に寄付を行い、永広昌之名誉教授からお礼のメッセージをいただきました。

岩手県立博物館の大石雅之首席専門学芸員からは、当協会の申し出に大変感謝していただきましたが、地質標本整理やその他修復作業が大変忙しく、必要な物品のチェックにまだまだ時間がかかるとのことでした。そのため、今回の「大地52号」発刊までには物品寄贈ができませんでしたが、大石雅之首席専門学芸員の作業が一段落した段階で、不足する物品を教えていただきそれらを寄贈することになっています。



寄付金を贈呈する早坂理事長（右）と東北大学総合学術博物館の永広昌之名誉教授（左）



寄付金に対する東北大学からのお礼文書

3.11大震災で被災した歌津「魚竜館」標本のレスキュー事業

東北大学総合学術博物館 永広昌之

2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震によって発生した大津波は東北日本の太平洋沿岸域に大きな被害をもたらし、海岸沿いの地域では多くの人命が失われ、また、建築物やライフラインが壊滅的な被害を受けた。津波に襲われた建物にはいくつかの博物館施設もあった。被災した文化財・資料・標本などの貴重な文化遺産を安全に保管し、洗浄・除菌や修復を行い、後世に継承するために、文化庁が中心となって文化財レスキューの活動が各地で行われたが、宮城県に自然史分野を扱う博物館はなかったため、東北大学総合学術博物館は文化財レスキュー宮城の自然史標本担当となった。ここでは、南三陸地域の自然史標本のレスキュー活動のうち、地質標本レスキューの概要について紹介する。

宮城県南三陸地域では、気仙沼市の岩井崎プロムナードセンター、南三陸町歌津の魚竜館、石巻市の雄勝公民館、女川町のマリナル女川などに地質標本が収蔵・展示されていた。調査・標本レスキュー作業はライフラインの回復を待って、4月以降に行われた。

岩井崎プロムナードセンターは、3階建ての建物全体が水没し、建物外壁は残ったが、内部はほぼ完全に破壊された。センターには地元気仙沼のペルム紀化石標本や岩井崎石灰岩標本など数10点の化石岩石標本があったが、大部分は流失し、回収されたのは腕足類など10点のみであった。

雄勝公民館は2階建ての建物全体が壊滅的な被害を受けた。2階展示室に地質標本があったが、その展示物の詳細は不明であり、調査の際にはウミユリ石灰岩の標本1点のみが確認された。

マリナル女川には東北大学総合学術博物館が貸出した約50点の化石標本が1階に展示されていた。展示室の内部はほぼ完全に破壊され、重油混じりの土砂が流入していた。幸い化石展示ケースは軽微な破損で、標本はすべて回収された。

南三陸町の魚竜館は、旧歌津町館崎での世界最古(前期三畳紀)の魚竜ウタツギョリュウの発見(1970年)、管の浜での中期三畳紀のクダハマギョリュウの発見(1985年)を契機として、1990年に建設された。魚竜館は水産振興センター2階展示室とクダハマ魚竜化石産地露頭を覆う「魚竜館」からなる。旧歌津町はベザノ魚竜の産地として有名なイタリア・ベザノ市と友好都市条約を結び、1999年には魚竜館を会場とする国際魚竜化石サミットを開催している。このサミット開催を機に、魚竜館は多くの魚竜標本を展示する「魚竜」博物館へと発展した。魚竜館は2階屋根を越える津波に襲われたが、建物外壁は残り、多くの展示標本類は展示室内部を激しく移動したものの、展示室内にとどまっていた。50数点あった魚竜アンモノイド貝類等の化石標本は、損壊したものもあったが、2点を除いて回収できた。4月4日の予備調査以降、数回にわたる調査と小型の標本のレスキュー事業が行われた。大型魚竜標本の回収は困難であったが、文化庁の援助を受けて、10月30日～11月1日に大型クレーン車を導入して搬出した。

レスキューされた標本の一部には、破損や海水による劣化が見られた。これら標本を未来に継承し、研究・教育あるは普及への活用を図るためには早急な修復作業が望まれていた。とくに、11月1日に救出されたドイツ・ホルツマーデン産のジュラ紀大型魚竜標本(Stenopterygius:125.5 cm×294.5 cm)は、裏打ちボードが海水により劣化し、また、鉄製フレームは腐食し、錆びに覆われていた。そのため12月に化石本体をボードから切り取り、ボードの劣化した部分を除去し、新たなボードにはりつけ、さらにステンレス製フレームで強化する修復作業を業者に委託し、行った。現在魚竜館からレスキューされた化石標本類の多くは総合学術博物館に保管されており、修復されたホルツマーデン産標本とベザノ産三畳紀魚竜化石標本(レプリカ)の2点の大型標本は仙台市科学館で展示されている。

なお、ホルツマーデン産魚竜標本の修復経費には、日本地質学会および東北地質調査業協会からの助成金をあてた。ここに謝意を表する次第である。



修復されたドイツ・ホルツマーデン産魚竜化石
(仙台市科学館エントランスホール)



歌津「魚竜館」からの大型標本レスキュー作業
(2011年11月1日)



岩手県立博物館

この博物館は岩手県の県制百年を記念して昭和55年(1980年)10月に開館した総合博物館です。地質時代から現代にいたる地質・考古・歴史・民俗・生物などの資料が展示され、岩手県の自然と文化が理解できるようになっています。
(同館のホームページより)